

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008年度～2010年度

課題番号：20520460

研究課題名(和文) ITを活用した海外への日本語教育支援方法のローコストモデルの研究

研究課題名(英文) Research of Supporting Japanese Language Learning with IT at low cost

研究代表者

藤村 知子 (FUJIMURA TOMOKO)

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・教授

研究者番号：20229040

研究成果の概要(和文)：海外の学習者と日本を直接結ぶ遠隔授業を、Skype が利用できる程度のローコストのインターネット環境において実現できる意義は大きい。複数の受講者と個別に結ぶ場合は、接続速度が遅いため資料の提示ができないという制約はあるものの、講義形式の授業を実施することができた。本方式は支援方法の一つとして有効である。

研究成果の概要(英文)：This project examines the conditions which implement effective distance learning between Japanese language learners and Japanese native speakers. It is significant that internet environment for the Skype level connected a native Japanese language teacher to several learners individually, and provided lecture style class, although it could not be presented handouts under the low connection speed

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本語教育 文章論

科研費の分科・細目：複合領域 日本語教育

キーワード：遠隔教育、読解教育、予測、中級レベル

1. 研究開始当初の背景

情報通信技術の発達と普及に伴い、途上国の大学においても、プロジェクト等の設備が教室に設置されるようになった。

海外における日本語教育においては、日本語母語話者と直接話せるということは、学習の動機付けを高めるのに効果的である。

テレビ会議システムのような高額な機材を使用すると、高画質、高音質でのやりとりが可能となるが、相手方も同等の設備を必要とし、日本語教育が盛んな地域の教育機関に設置されているとは限らない。また、授業を

行う教員も機器の扱いに慣れていないため、負担が大きいといった問題があった。

そこで、大学に標準的に備えられている設備とインターネットに接続できれば使用できる Skype 等の通信手段を利用し、ローコストで海外の日本語学習者へ支援する方法を検討することにした。

2. 研究の目的

海外の大学において日本語を主専攻とする学生の到達目標の一つとして、日本語の講義を聴き、それについて意見の発表ができる

ことが挙げられる。本研究では、ローコスト、すなわち、大学に標準的に備えられている IT 設備を利用して、講義聴解・意見発表を支援する方策について研究することを当初の目的としていた。

しかし、本研究の提携先に予定していた教育機関では、コンピュータ教室には LAN 回線がひかれ、インターネットに接続できるものの、日本語授業が通常行われている普通教室には LAN 回線がひかれていなかったこと、相手先の授業スケジュールに合わせて直接接続することが難しかったことから、課外に数名の受講者と Web 会議システムで結んで遠隔授業を行うこととし、現地に赴くのではなく、日本にいながらにして、授業形式で支援できる遠隔授業のあり方について検討することとした。

3. 研究の方法

(1) 教室授業と遠隔授業の比較

教室授業で行った内容とほぼ同じ内容を Web 会議システムを通じて海外の日本語学習者と結ぶ遠隔授業で行い、教授者の観点から両者の比較を行った。

(2) 遠隔授業の相手先

遠隔授業の相手先はタイのタマサート大学教養学部日本語学科である。タイは近年 IT 関連のインフラが急速に整備され、テレビ会議システムを使った遠隔授業も各地で行われるようになってきている。タマサート大学教養学部日本語学科のあるランシット・キャンパスにおいてもブロードバンド回線が整備され、学生のノートパソコン所有率も高いことから、タマサート大学と本センターを Web 会議システムで直接結んだ日本語授業を行うこととした。

(3) 遠隔授業の形態と日本語のレベル

授業形態としては、教授者による講義を聴く、学習者が発表する、学習者相互にディスカッションをする、という形式が考えられるが、遠隔授業で学習者主体の授業をするためには現地の教員の負担が大きいことが予想されたため、日本側の講義を聴くという形態とした。

それに伴い、日本語のレベルは中級以上とした。初級レベルでは、教授者と受講者の間のやりとりを頻繁に行うため、「講義を聴く」という形態では授業の展開が難しいためである。

(4) 教室授業と遠隔授業の内容

インターネットを利用した、日本語を含む外国語の授業では、異文化理解を目的とする交流授業が多いが、今回の相手校は、日本語主専攻の学科であることから、日本語学ないしは日本語教育学に関する内容が望ましいこと、遠隔授業の効率を高めるためには事前の予習が欠かせないことから、教師の関与が

なくとも予習のしやすい「読解」の授業を行うこととした。

(5) 受講者

教室授業の場合は、東京外国語大学留学生日本語教育センターが実施している、短期交換留学生や国費留学生（除学部進学留学生）を対象とした「全学日本語プログラム」の「中級読解」のクラスの受講者である。日本語のレベルは、中級前半を終了した段階である。

遠隔授業の場合は、タマサート大学教養学部日本語学科の学生で、大学に入ってから日本語学習を開始した学生で、中級後半を終了した段階である。

(6) 読解のスキル

読解過程においては、文字から単語、文、段、文章へと積み上げていくボトムアップ処理と、既存の知識を使って予測を行うトップダウン処理があり、双方があいまって文章理解が行われているとされている。本研究における「中級読解」では、トップダウン処理の予測に関わるとされるスキーマのうち、形式スキーマを活性化させることにより、未知語が多く含まれる文章でも、できるだけ短時間で正確な理解に結びつけることを意図した。

ここでいう形式スキーマには、文章の構造分析に用いられる次の 6 種類の表現形式を用いた。「接続表現」「指示表現」「反復表現」「省略表現」「提題表現」「叙述表現」、これらの持つ機能を意識化し、文脈展開を予測しながら読むことを読解のスキルとした。授業の概要を表 1 に示す。

(7) 読解授業の教材

形式スキーマの解説には、寺村秀夫他(1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』(おうふう)を参考にした。また、言語表現に着目して読むことによって、どのような予測が可能で、どのような効果があるのかを確かめるため、東京外国語大学留学生日本語教育センター編(1994)『中級日本語』(凡人社)の読解文を用いた。図 1 に教室授業、遠隔授業に共通した授業の流れを示す。

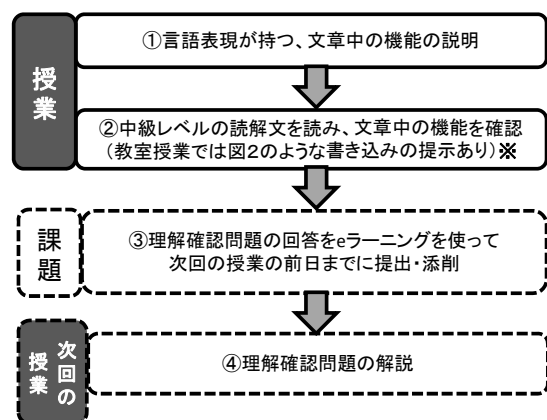


図 1 教室授業・遠隔授業共通の授業の流れ

表1 中級レベルの読解授業の概要

	本学 全学日本語 プログラム	タイ タマサート大学教 養学部日本語学科
授業 形態	教室授業 正規授業	遠隔授業 課外の任意参加 (受講者固定)
	1回 90分	1回 60分
講義 の内容と 回数	・接続表現 2回 ・指示表現 1回 ・省略表現 1回 ・提題表現 2回 ・叙述表現 2回 ・中心文 1回 ・主題文と 文章型 1回 ・読解演習 1回	・機材の設定 1回 ・接続表現 2回 ・指示表現 1回 ・提題表現 1回 (含省略表現) ・叙述表現 1回 ・中心文・主 題文・文章型 1回
受講者	中国 2名 ラオス 1名 ベトナム 1名 トルコ 2名 ロシア 1名 イタリア 1名	・日本語学科 3名 4年生 ・大学院生 1名 (日本語教師 養成コース)
レ ベル	400 レベル 日本語能力試験 3級と2級の間	日本語能力試験 2級/N2 合格

4. 研究成果

(1)接続速度が遅い地域での Web 会議システムの問題点

Web 会議システムを利用したのは、授業で配付するプリント類をそれぞれの受講者のパソコンの画面に共通に提示できるということが最大の理由であった。また、こちらがそのシステムの利用料を支払えば、相手方は、利用料を支払う必要がなく、しかも機材についても、Skype が使える程度の機材で十分に対応できるということもあった。

しかし、PowerPoint のスライドや Word のファイルを提示しようとする時、伝送容量が大きすぎて、画面がフリーズするため、ビデオ通話（音声と相手方の顔が見える通話）にせざるを得なかった。

(2)遠隔授業における資料提示と板書

当初は、Web 会議システムの資料提示装置を利用し、以下のことを遠隔授業でも行う予定であった。

①資料提示－授業の進行の確認

教室授業では、書画カメラに投影して「プリントのここを見て下さい」と指し示し、受講者が教師の指示通りにプリントを見ているかどうか目で確認することができる。

②資料提示－読解文への書き込み

教室授業では、図1に示した「②中級レベルの読解文を読み、文章中の機能を確認す

る」という段階で、図2に示すように指示表現の指示内容、接続表現が結んでいる前後の内容とその関係、文と文、あるいは段と段の関係などを読解文に書き込み、視覚的に文章構が把握できるよう、書画カメラで提示した。

しかし、遠隔授業では、前述のとおり、資料提示の機能が利用できなかった。授業後に確認できるように pdf ファイル等に変換して送る必要があった。

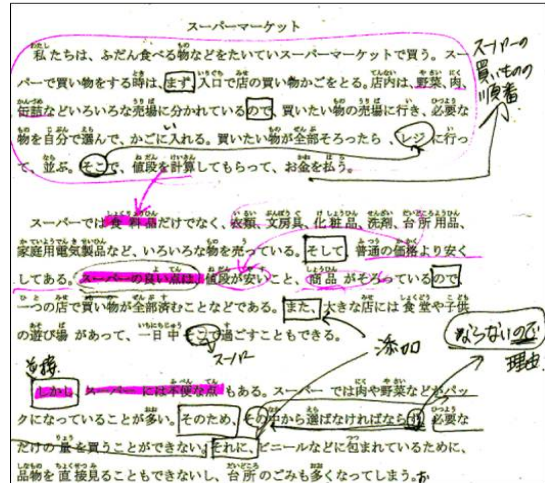


図2 読解文への書き込みの例

③板書

教室授業では、キーワードや質問の回答を板書しているが、遠隔授業では、テキストチャットの機能で代替することができた。受講者の顔の動きを見てみると、資料の提示ができなかったため、テキストチャット機能によるキーワード等の表示は何度も見て、受講していたのが確かめられた。

(3)学習者の反応の把握

学習者を前にした教室授業では、教師は学習者の反応を観察しながら、授業の進行をコントロールすることができる。特に、外国人日本語学習者に対する日本語の授業で、教室全体が急にざわつく場合は、教師が理解困難な言葉を発したことにより、学習者同士が意味を知っているかどうか小聲で聞き合っていることが多い。そこから、話の流れを修正して、例示や説明を補足し、わかりやすく授業を進めることもできる。

それに対して、教師と受講者が同一空間にいない遠隔授業の場合は、質問を重ね、そこから引き出した回答により、比較的容易に理解度を把握することができるが、教室で感じられるざわつき、私語といった雰囲気を感じられないため、教師が一方向的に話すことが多いように感じられた。

Web 会議システムを使う遠隔授業の利点の一つに画面に一人ずつの顔が正面から見えるということがある。これは、配付資料を見

るために学習者が下を向くことが多い教室授業とは異なる点である。遠隔授業であっても、正面からの映像が学習者の状況把握を当初の予想より容易にしている可能性がある。

(4) 結論

インターネットを利用して日本と海外の教育機関を直接結ぶ遠隔授業の場合、異文化理解を目的とする交流授業が多いが、それを「教室」において実現させるには、時差が少ない地域と結ぶ場合においても、授業時間帯が異なること(例:日本は9時-10時半でも、相手方は8時20分-9時50分など)、普通教室にはインターネットに接続できる環境がないということを解決する必要がある。

その点、Web会議システムやSkypeのグループテレビ通話機能を利用した複数の受講者に対する講義形式の遠隔授業は、「板書」の制約があるものの、事前の調整がさほど困難ではない。また、教師がパソコンの画面で受講者の表情が視認できる範囲であれば、授業として成立することが確かめられた。

Skypeという個人レベルで扱えるインターネット環境と機材で日本語学習者が日本語母語話者の教師と直接やりとりできることは日本への渡航経験がない、あるいはその予定もない学習者にとって、自己の日本語力を確かめ、自信につながるものとも考えられる。また、現地に赴かなくても日本にいながらにして海外の学習者と直接話せることも日本語教育支援の方法として有効である。

(5) 今後の課題

接続速度が遅い地域と結ぶ場合は、図2のような書き込みや図示をどのように提示するか、検討する必要がある。

また、中級レベルの読解授業の課題としては、どの日本語レベルから、6種類の言語表現を文章理解における形式スキーマとして意識化させる授業を行うのが効果的か、検証する必要がある。表1に掲げた言語表現は、中級レベルの日本語の学習項目であるため、一通り終わった段階で行うのが効果的か、学習しながら行った方が効果的か、という検証である。

次に必要な検証が、受講者の日本語のレベルと扱うテキストのレベルの差をどのぐらいつけば、理解しやすいか、そして、易しすぎて学習意欲がなくなるか、ということである。今回は、初級段階から中級段階への「つなぎ」と言われる段階に相当するレベルの読解教材を、教室授業では中級前半の受講者に対して、遠隔授業では中級を終了した受講者に対して用いた。教室授業の上位の受講者の反応からは適切であったと判断できるが、下位の学生からは「難しい」、遠隔授業の受講者からは「易しすぎる」というフィードバックがあった。2段階下のレベルで扱うテキストがいいのではないかとと思われる

が、その検証が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

藤村知子、Web会議システムに適した日本語教育支援の検討—中級読解授業の試みを通して、日本教育工学会研究報告集、日本教育工学会、査読無、JSET11-1、2011、262-272
〔学会発表〕(計1件)

藤村知子、Web会議システムに適した日本語教育支援の検討、日本教育工学会、2011年3月5日、静岡大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤村 知子 (FUJIMURA TOMOKO)

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・教授

研究者番号：20229040